

中条帯刀と中条流産科

山形 徹 一

「慶長使節と南蛮医学」(日本医史学雑誌第二十九卷第一号)のなかで、私は「支倉常長の随員の一人であった中条帯刀は婦人科学を修め、帰国後密告によって入牢したが、棄教を認められて釈放された。その子孫の中条養喜は仙台藩医員(婦人科)として採用された」と述べておいた。

キリンタン禁制時代におけるキリンタンの家系をさぐることは容易なことではないが、帯刀と養喜の關係については、「東藩日新医事略説」(大正十五年五月)のなかで鈴木省三が指摘したのが最初である。

中条帯刀がキリンタンとして密告され、入牢して棄教するに至った顛末は、「石母田文書」(昭和五十六年二月)に明らかにされている。

しかるに、「伊達世臣家譜」(平士之部)の中条家譜によれば、「中条帯刀資種為祖、寛永中坐西洋兇徒事、告老而

退、後号道喜、以婦人医行于世」と記されている。

次いで、「伊達世臣家譜」(医師之部)によれば、「以資種第五男中条資房為祖、其裔以医(婦人科)為業。資房嘗受中条流医术於父資種」と記されている。

したがって、中条帯刀は平士として伊達政宗に仕えていたが、五男中条資房は父帯刀より学んだ中条流婦人科を以って、仙台藩医員として仕えたことが明らかである。

現在中条流産科と伝える刊本としては、「中条流産科全集」や「中条流産前産後」があるが、その内容を検討して報告したいと考えている。

(東北大学)